保育者養成課程における授業改善に関する研究
―講義と演習を連動させた授業に対する受講学生の意識―

溝邊　和成[i]，永井　毅[ii]

保育における自然体験活動の充実が重要視され，その指導に携わる保育者の養成・育成が喫緊の課題とされている。本調査研究では，保育者養成課程で取り扱われている保育内容「環境」において，授業改善として取り組んだ講義（知識獲得）と演習（自然体験）を連動させた授業に対する受講学生の意識変化を明らかにすることを目的とした。2015年前期に実施した私立短期大学での保育内容「環境」の授業を受講した保育士希望学生（第２学年）78名を対象に，意識調査を行った。授業で扱った主たる内容は，「土，虫，植物」であった。調査の分析結果から，受講学生は，個々の内容の理解を深めるとともに自然環境に対する不得意な意識を軽減したり，保育実践に積極的に関わろうとする意識の高揚が見られたりした。また，指導教員の取り組む姿勢から教師モデルのイメージ化が図られ，受講した学生自身のその後のキャリア形成にも影響していることがわかった。

キーワード：保育者養成課程，授業改善，講義と演習の連動，受講学生の意識，キャリア形成

１．研究の背景

近年，保育における自然体験活動の充実が重要視され，身近な動植物に関わりを持つことで，幼児の生き物に対する感受性を養うことが期待されている（ex. 幼稚園教育ガイド 2017）。また，保育者[1)] 養成段階における自然体験に関しても，以前から，その重要性と必要性が指摘されてきている。例えば，前迫（2000）・前迫ら（2004）の報告に加え，前迫（2006）の「知識注入型ではなく，直接体験型のフィールドワーク」を重要視する見解や前徳（2010）の自然体験の必要性などがそうである。

保育現場における自然体験活動は，比較的よく実施されているものの（井上ら 2007），保育者養成校における「自然」に関する学習機会には，幅があることが指摘されている（井上 2008）。自然体験に対する養成段階のあり方については，大橋（2007）や大橋ら（2008），桂木ら（2012）をはじめ，野外体験等に着目する高野（2011）などの論稿にも見ることができる。さらに足立ら（2009）の報告では，保育者養成課程における自然体験活動に対する試行と期待が示されている。また，そういった活動に対する効果については，草野（2011）などの報告にも見られ，その後も自然体験活動を進めるための授業の試みがいくつかなされてきている（ex. 森田ら 2014）。

こうした動向は，自然体験活動に関わる保育者の養成あるいは育成が常に重要であり，そのトレーニング的要素が欠けてはならないという認識の表れといえよう。加えて，保育者養成校においても，積極的かつ具体的なプログラム化が望まれるところであ

ⅰ　兵庫教育大学大学院学校教育研究科教授
ⅱ　湊川短期大学幼児教育保育学科准教授

る。自然体験や自然に関する知識の有無によって，実際の保育実践や保育実習に影響があったり，就職活動に支障が生じたりする場合も考えられる。受講者の実態を踏まえた授業や，活用しやすい指導スキル獲得も含む授業においては，これまでの研究報告からも少しずつその成果と課題が明らかにされてきたが，十分に検討されたとは言いがたく，今後も継続し検討を進めていかなくてはならないといえる。例えば，自然体験活動のみでよいか，あるいは限られた時間の中で，どの程度の自然体験活動が必要か，苦手意識の克服をどのようにすればよいか等が考えられる。そうした問題に対する解答の一つとして，永井（2014a，2014b）の報告が挙げられる。ここでは，直接体験と知識獲得がつながる保育者研修の効果報告がなされている。また，それらを踏まえて，保育実践の現場と連動する演習に参加する学生を対象とした調査も行ってきている（永井 2016）。このような試みは，自然体験のみを重視することにとどまることなく，基礎的知識の獲得のみに終始するのではない，新たな体験と知識の融合型プログラムづくりを予見させてくれる。

そこで，本報告では，保育者対象の研修会の取り組み（ex. 井上 2008，峰ら 2009，永井 2014a，2014b）や永井（2016）を参考に，保育者養成課程の授業として「虫[2)]，植物，土」をテーマに行った実践を研究対象として取り上げる。授業形態は，講義（知識獲得）と演習（自然体験）の連動型としている。参加学生の授業前後の意識変化を分析することから，その効果等を明らかにすることを目的としている。

2．調査の概要

(1) 調査対象授業

実施時期：2015年前期

対象授業科目名：保育内容「環境」（表１）

授業内容の配分・展開については，次の３つの配慮項目を反映させた。

1　保育内容「環境」で扱う内容を反映させた講義に加え，直接体験ができるように演習形式を組み入れること。ただし，時間配分は講義形式１に対して演習形式を２の割合で設定する。

2　開講期間中に保育実習（必修）が実施される点を配慮し，受講生は保育現場での取り組みができるので，実習中に取り組みやすい自然体験を保育実習前に設定しておく。

3　開講期は，春から夏となるため，その季節に応じた動植物や遊び（幼児向け）などを配慮する。

表１　授業の概要

回	授業内容（講：講義，体：体験活動）
1	講：授業ガイダンス
2	講：身近な虫の特徴　体：虫の観察（畑・池等）
3	体：虫捕り　講・体：砂遊び
4	講：夏野菜の栽培　体：夏野菜の植え付け
5	講：土の特性について　体：堆肥づくり
6	講・体：泥遊び　体：泥だんごづくり
7	講：栽培体験と子供の成長　体：夏野菜の世話
8	講：保育計画と自然体験，環境構成（物的・人的配慮）
9	講：体験と思考
	（保育実習：２週間）
10	講・体：諸感覚を使った自然遊びゲーム（ex. ネイチャーゲーム）
11	講：身近な野草　体：草花遊び
12	講：植物の特性と活用　体：紙すき（野菜利用）
13	講：植物による染物　体：布染め
14	講：栽培野菜の料理方法　体：調理実習
15	講：まとめ・振り返り

授業実施場所は，講義室のほか，演習の実施場所として，当該大学に隣接する菜園，学内調理室，図工室としている。

(2) 調査の方法

調査時期：2015年４月～９月

調査対象：私立K短期大学　授業科目：保育内容「環境」受講学生（保育者希望学生：第2学年）78名

調査方法：

① 授業前後に自記式質問紙調査（4件法）を行い，各項目の平均値を算出した後，対応のある t 検定を実施した（統計ソフト：Excel 2013）。項目は，表2に示すとおりである。

② 授業終了後，受講生の授業に対する感想（自由記述方式）を集約し，M-GTA（ex. 木下 1999, 2003, 2007）の手法を参考に，自己意識の変化について定性分析を行った。自由記述の整理及び分析は，複数の研究者で行った。その際の分析のテーマは，「講義と体験活動を連動させた授業の参加学生への影響」であった。また分析の観点は，「受講生の意識変化」とした。カテゴリーは，生成された概念および概念間の関係から形成し，さらにそれらの関連図を作成した。

表2　質問項目

項目	内　容
土	土1：泥だんご遊びやそれにつながる遊びができる
	土2：土の特徴を知り，様々な遊びができる
	土3：水と土の性質を知り，泥遊びができる
	土4：植物と微生物を使って土をつくることができる
虫	虫1：虫が近くに来ると走って逃げる
	虫2：虫を触る機会があったら触る
	虫3：虫の世話する方法を知っている
	虫4：虫の特徴を知っている
植物	植物1：野草を使って遊ぶことができる
	植物2：野菜を育てることができる
	植物3：収穫野菜を使った料理を作ることは簡単だ
	植物4：植物を使って染め物をつくることができる
	植物5：雑草や野菜くずを使って堆肥をつくることができる

(3) 倫理的配慮

本調査に際しては，対象授業を受ける保育者希望学生に対して，アンケート等を実施する目的およびそのデータの扱いについて口頭で説明し，承諾を得た。また個人が特定されたり，個人の不利益になったりしないよう，分析結果の公表においては，匿名性を担保した。

3．意識調査の結果・考察

「土」「虫」および「植物」に関する結果は，表3に示す通りである。

表3からもわかるように，「土」については授業後，どの項目も平均値が3点台と変化し，有意な差が見られた。特に，「土2：土の特徴を知り，様々な遊びができる」については，授業後の平均値が3.50と高い結果となった。また，授業前の「土4」の平均値は，1.1に満たなかったが，授業後では，約3倍（3.35）の数値を示していることがわかる。

これらのことから，参加した学生は，「土」に関する特徴（知識）を学び得ることができたと感じるとともに「土」を使った泥だんごづくりや泥遊び，さらに土づくりについても体験的にそのよさ・面白さを実感したと推察される。

「虫」については，「虫1」の「虫が近寄ってくると逃げる」項目では，授業前後で平均値 3点台か

表3　「土」「虫」「植物」に対する学生の意識

	平均値（SD） 授業前	授業後	t 値
土1	2.64(.73)	3.00(.36)	3.58***
土2	2.29(.86)	3.50(.52)	11.11***
土3	2.58(.73)	3.33(.55)	7.94***
土4	1.08(.86)	3.35(.52)	31.17***
虫1	3.02(.77)	2.38(.68)	7.34***
虫2	2.31(.90)	2.96(.61)	8.10***
虫3	2.23(.73)	2.96(.41)	8.45***
虫4	2.12(.70)	2.83(.46)	8.25***
植物1	2.13(.74)	2.97(.51)	8.75***
植物2	2.27(.80)	3.05(.42)	9.05***
植物3	2.46(.84)	3.15(.51)	7.88***
植物4	2.03(.88)	3.29(.51)	38.50***
植物5	1.28(.55)	3.14(.52)	22.10***

*** p<.01

ら２点台前半に低下している。「虫２」の「触る」ことに関しては，授業前後で平均値が大きくプラスに変化している。生き物の「世話」（虫３）や「特徴」（虫４）の項目においても授業前後で，有意な差が見られ，肯定的変化が表れている。

このような結果から，授業前まで「虫」が苦手でどちらかといえば，避ける学生が多かったが，授業を通して，変化した学生が多かったと考えられる。つまり授業で，対象とした「虫」に関する知識理解を高めることとともに実際に「虫」などを「触る」行為・活動によって，その克服がなされた結果だと評することができる。

さらに，「植物」に関する結果では，すべての項目に有意な差があることが確認できる。特に授業後の「植物５」（堆肥づくり）では，平均値1.28（授業前）が２倍以上に高い数値となっている。これは，「土４」での変化と同様，植物と土との関係についてより理解が深まったととらえることができる。「植物４」の植物によって布を染める作業についても，「植物」中でもっとも平均値が高く（3.29），肯定的評価がなされていると解釈できる。また，それは，学習効果が非常に高かったことを示しているともいえる。

４．学生の感想（自由記述）の結果・考察

(1) 概念およびカテゴリーの生成・構築

受講後，学生の感想（自由記述）を分析した結果，21の概念が生成され，そこから６つのカテゴリーが構築された（表４）。

自然に関する講義とその関連した体験活動を含む授業プロセスでは，【授業内容の理解】【授業としての工夫】【授業としての成果】および【保育実習への期待】が生成された。また，将来への姿ともいえる【教師モデルのイメージ化】が見られ，さらに職業選択につながる【キャリア形成への貢献】のカテゴリーにまとめられた。

【授業内容の理解】では，「普段ではしないような虫を触ったり，大根を植えて食べたり出来てとても良い経験になりました。」などの〈充実した体験活動／豊かな体験〉が最も多い件数を数えた。「（略）授業を受けていく中で，虫に対する興味が湧き，植物に対する知識が増え，自分の世界が広がりました。」といった〈学びの広がり〉として受け止められる表記（８件）や〈知識の習得〉（４件），〈自然物に対する保育方法〉（２件）など，授業内容に対する理解の変化がよく表れている 。

【授業としての工夫】には，「（略）みんなが楽しめるよう，またためになる授業を行ってくれて（略）」の〈授業構成／スキルの工夫〉とともに，「講義を受けてから実際に体験するという形が分かりやすくてよかった。」「（略）ただ座ってする授業と違い，自分が実際に体験したことで，ひとつひとつの活動がとても心に残りました。」といった表現からもわかるように，〈知識と体験融合の効果〉〈講義から体験へのプロセスのよさ〉の工夫点が受け止められ，浸透していたことがわかる。

【授業としての成果】では，「虫も苦手意識がすごくて幼稚園の頃は芋掘りでは地面に立つことも出来なかったのに，今では少し触れるようになったのが本当に嬉しかったです。」に代表されるように，〈苦手意識の克服〉に関する文章も多く（10件），その効果が見受けられる。また，「自然物に対して興味が持てたり，仲間と一緒に何か活動をしたり，ともに喜んだり悲しんだりたくさん笑いあってとても楽しかったです。」や「体験活動が多くあったので，友達と楽しみながら自分自身が子どものような気持ちで参加することが出来た。」のように，〈共同作業のよさ〉や〈子ども心の呼び起こし〉も授業の成果として受け止めていることがわかった。さらに授業のよさや効果を実感する〈本授業の価値〉〈実感する授業効果〉も見られた。

【保育実践への期待】は，〈保育現場で役立てたい気持ち〉と〈保育に対する自信〉の概念を含み，前者では，「現場で使えるものばかりで，是非私も実践したいと思います !!」「（前略）子どもたちに自然

表 4　講義と体験活動を連動させた授業による影響

カテゴリー	概　念	データ例（件数）
【授業内容の理解】	〈充実した体験活動／豊かな経験〉	「普段ではしないような虫を触ったり大根を植えて食べたりなど出来てとても良い経験になりました。」(12件)
	〈学びの広がり〉	「最初は「なんの授業なんやろう。」や「え，虫に触るの ?!」などの思いがあったが，授業を受けていく中で，虫に対する興味が湧き，植物に対する知識が増え，自分の世界が広がりました。先生の話ひとつひとつに引き込まれていきました。」（8 件）
	〈知識の習得〉	「今までは，虫の飼育の仕方や植物の育て方を詳しくしらなかったのですが，完璧ではないけれど，以前より知識が増えました。」（4 件）
	〈自然物に対する保育方法〉	「環境の授業を通して，子どもたちに植物や動物に対してどのように保育すれば良いかを学ぶことができました。」（2 件）
【授業としての工夫】	〈授業構成／スキルの工夫〉	「とても工夫してみんなが楽しめるようまた，ためになる授業を行ってくれて本当にありがとうございました。」（4 件）
	〈知識と体験融合の効果〉	「この15回でやった授業は，座学実技全てを含めてとても楽しかったです。それに，ただ座ってする授業と違い，自分が実際に体験したことで，ひとつひとつの活動がとても心に残りました。」（3 件）
	〈講義から体験へのプロセスのよさ〉	「講義を受けてから実際に体験するという形が分かりやすくてよかった。」（3 件）
【授業としての成果】	〈苦手意識の克服〉	「虫も苦手意識がすごくて幼稚園の頃は芋掘りでは地面に立つことも出来なかったのに，今では少し触れるようになったのが本当に嬉しかったです。」(10件)
	〈共同作業のよさ〉	「自然物に対して興味が持てたり，仲間と一緒に何か活動をしたり，ともに喜んだり悲しんだりたくさん笑いあってとても楽しかったです。」（4 件）
	〈子ども心の呼び起こし〉	「体験活動が多くあったので，友達と楽しみながら自分自身が子どものような気持ちで参加することが出来た。」（3 件）
	〈本授業の価値〉	「自然体験活動の良さをふんだんに知ることができてとても自分自身が成長することができた授業でした。」（1 件）
	〈実感する授業効果〉	「最初は菜園に行くのが嫌だったり，めんどくさいとゆう気持ちもあったのですが，授業を受けていくうちに菜園にいって先生に植物や虫の色々なことを教えてもらうのが楽しくなってきました。大根を植えて自分で育てるのも初めてで，自分たちで育てているとゆうのが水をあげたり，成長を観察する上でとても実感しました。また，その育てた大根を調理して食べるのも楽しくて，自分たちで作ったものだから余計においしく感じたのだと思います。」（1 件）
【保育実践への期待】	〈保育現場で役立てたい気持ち〉	「現場に出てから実践できそうなことばかり，先生から教えていただいたのでこれからはレジュメを見て思い出し，子どもたちに自然のおもしろさや，動物の飼育の仕方，命の大切さを伝えていきたいと思います。」「現場で使えるものばかりで，是非私も実践したいと思います !!」(13件)

（次ページへ）

（前ページより）

カテゴリー	概　念	データ例（件数）
	〈保育に対する自信〉	「菜園で虫を捕まえたり，泥団子を作ったり，ネイチャーゲームをみんなで遊んだり，保育現場で使えることを全身を使って楽しみながら学べたので，これから自分が子どもたちに教える時になってもこの授業でしたことを思い出して出来ると思う。」（４件）
【教師モデルのイメージ化】	〈教師モデルとしての指導教員〉	「N 先生は私たちが興味を持てるような声掛けをしてくれたり，虫や野菜や環境のことが大好きで詳しくて，私も保育者になったときのお手本にしていきたいと思いました。」（５件）
	〈指導教員の教授姿勢〉	「N 先生自身がとても子どもが好きでとても自然がすきなんだなということが感じられて自然活動を自分自身が楽しむ大切さを教えて貰うことができました。」（２件）
	〈現場経験を有する指導教員の知恵〉	「実際に保育現場で働いたことのある先生の話はとても興味深く，経験談を聴けたことはとても自分のためになったし，たくさんの知識も学ぶことが出来たので良かったです。」（２件）
	〈指導教員のポリシー〉	「環境の授業で何よりも心に残ったのが先生の言葉です。実際に保育園に務められていたので，現場の話や子どもたちの話が聞けて良かったです。先生の保育園に務めると色々なことがあるけど，何よりも忘れてはいけないのが子どもという言葉が深く心に残りました。何があっても１番は子どもということを胸に刻んでおきます。」（１件）
	〈指導教員のサポート（保育実習中）〉	「実習期間中の先生のメッセージやこまめに授業内容を送ってくださる先生がとてもすごいなと思いましたし，実習期間中はとても励みになりました。」（１件）
【キャリア形成への貢献】	〈将来・就職後のビジョン〉	「来年から保育士として保育所で働くので，先生のように子ども達に自然の良いところを沢山教えてあげられるようになりたいです。そして自分自身も子ども達といっぱい自然体験活動を楽しめるようにしたいとおもいます！」 「保育士の指示だけで動く子どもは将来指示を待ち，人任せにする性格になるという言葉どおりにならないような保育を目指そうと考えるようになりました。環境の授業は私の将来に大きく影響しました。」（17件）
	〈就職先の選択〉	「環境のことについて知らなかったが，子どもに自然体験活動を沢山させてあげることが大切だと学んだ為，就職園も，自然体験活動が盛んなところを決め手にしました。子どもが自然の中で様々な気持ちが芽生えるよう私も関わっていきたいと思います。」 「就職先が食育をとても大切にしている所なのでこの授業で学んだことをたくさん試したいと思います。就職先を決める時にどんな園がいいかなぁと考えていた時に，N 先生が勤めていたような野菜を栽培したり，虫を飼育したり自然に触れあうことを積極的にしている園に就職したいと思い，決めました。」（２件）

のおもしろさや，動物の飼育の仕方，命の大切さを伝えていきたいと思います。」などと同様の表現が13件見られた。後者では，「菜園で虫を捕まえたり，泥団子を作ったり，ネイチャーゲームをみんなで遊んだり，保育現場で使えることを全身を使って楽しみながら学べたので，これから自分が子どもたちに教える時になってもこの授業でしたことを思い出して出来ると思う。」のような表現が特徴付けている。

カテゴリーの【教師モデルのイメージ化】には，〈教師モデルとしての指導教員〉には，「N 先生は私たちが興味を持てるような声掛けをしてくれたり，虫や野菜や環境のことが大好きで詳しくて，私も保育者になったときのお手本にしていきたいと思いました。」などが含まれ，「N 先生自身がとても子どもが好きでとても自然がすきなんだなということが感じられて，自然活動を自分自身が楽しむ大切さを教えて貰うことができました。」といった〈指導教員の教授姿勢〉を示す感想があった。また〈現場経験を有する指導教員の知恵〉にふれる「実際に保育現場で働いたことのある先生の話はとても興味深く，経験談を聴けたことはとても自分のためになったし，たくさんの知識も学ぶことが出来たので良かったです。」といった記述や「（前略）先生の保育園に務めると色々なことがあるけど，何よりも忘れてはいけないのが子どもという言葉が深く心に残りました。何があっても１番は子どもということを胸に刻んでおきます。」など〈指導教員のポリシー〉に注目した表現もあった。「実習期間中の先生のメッセージやこまめに授業内容を送ってくださる先生がとてもすごいなと思いましたし，実習期間中はとても励みになりました。」という〈指導教員のサポート（保育実習中）〉も示されていた。

【キャリア形成への貢献】では，〈将来・就職後のビジョン〉〈就職先の選択〉が生成された。〈将来・就職後のビジョン〉は17件を数え，「来年から保育士として保育所で働くので，先生のように子ども達に自然の良いところを沢山教えてあげられるようになりたいです。そして自分自身も子ども達といっぱい自然体験活動を楽しめるようにしたいとおもいます！」や「保育士の指示だけで動く子どもは将来指示を待ち，人任せにする性格になるという言葉どおりにならないような保育を目指そうと考えるようになりました。（後略）」などに代表されるように，具体的なビジョンが示されていた。また，〈就職先の選択〉では，「環境のことについて知らなかったが，子どもに自然体験活動を沢山させてあげることが大切だと学んだ為，就職園も，自然体験活動が盛んなところを決め手にしました。子どもが自然の中で様々な気持ちが芽生えるよう私も関わっていきたいと思います。」，「（前略）就職先を決める時にどんな園がいいかなぁと考えていた時に，N 先生が勧めていたような野菜を栽培したり，虫を飼育したり自然に触れあうことを積極的にしている園に就職したいと思い，決めました。」の表現のように就職先の決定に言及している。

(2) 授業による受講学生の意識変化のプロセス

本授業は，自然を対象にした講義（知識獲得）とそれに関わる体験活動の併用が特徴であった。図１は，その授業を受けることを通して得られた，学生の意識変容の概念プロセス関連図である。ここでは，【授業内容の理解】とともに，知識と体験が関連し合う【授業としての工夫】と学生の苦手意識の克服等につながる【授業としての成果】が結び付いている。さらに，保育に対する自信が芽生え，保育現場でも活用するという【保育実践への期待】がつながっていると考えられる。こうした保育実践へのモチベーションが高まっていくのと並行して，指導教員から得られる【教師モデルのイメージ化】が見られる。指導教員から得られる保育に対する考え方や，保育園経験から教えられる知恵等にふれることにより，この指導教員の姿を理想的な教師モデルとしてイメージしていることがわかる。授業を通して獲得された保育に取り組みたい気持ちとイメージされた教員モデルを踏まえた結果として，【キャリア形成への貢献】が導き出されたのではないかといえる。

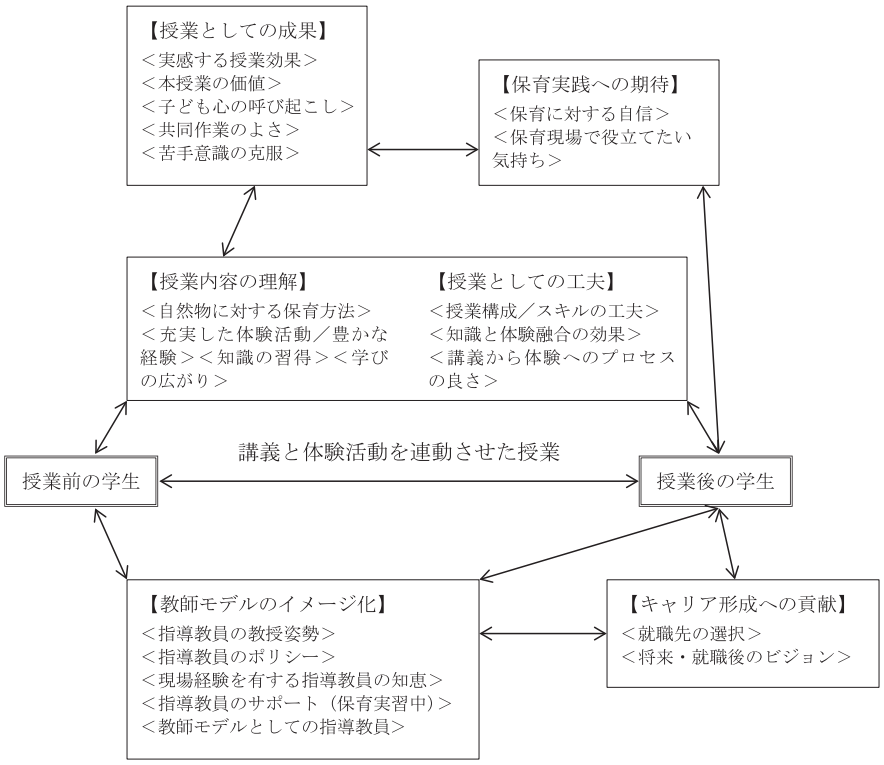

図１　講義と体験活動を連動させた授業を受講した学生の意識変化のプロセス関連図

就職先を選択するときの基準であったり，将来的な保育実践に関わるビジョンであったりする。すなわち，このスタイルの授業を受講したことが，保育現場のイメージを膨らませ，知識とともに具体的体験が保育実践への自信へとつながり，最終的には，自らの就職活動にも影響を与える結果も生じたと解釈できる。

５．まとめと今後の研究

本研究は，保育内容「環境」の授業において，知識獲得を中心とした講義形式に加えて関連した自然体験活動を組み合わせ，連動させることによって，受講学生にどのような効果が見られるかを調査したものである。その結果，対象授業よって，「虫」などをさわったりすることが不得意な学生もその苦手意識が軽減されたり，改めて「土」「植物」に関する知識や活用する体験を得たりできた。またそれによって，保育実践に関わろうとする意識に変化が見られるとともに，理想的な教師像のイメージ化にもつながった。さらに受講した学生自身のキャリア形成にも一部ではあるものの，ポジティブな様相が見られた。

今回の上記のような研究成果は，限定的であり，その一般性は十分に担保されていないといえる。それゆえ，本研究を端緒として，今後，キャリア形成にもつながる保育者養成課程の授業では，どのような内容・方法が有効なのか，そのあり方に焦点付け，多くのデータを集積していくことが望まれる。

さらに発展的研究として，必修とされている保育実習との関係も明確にする必要がある。保育園での実践は，この授業で学んだことを試す機会として位置付けることも可能であり，その視点からの検討も課題として考えられる。

註

1）　本稿では，幼稚園や保育所などで保育に従事する者を表す用語として「保育者」を用い，統一している。

〈参考文献〉

岡田正章・網野武博・大戸美也子・小林美実・萩原元昭・千羽喜代子・上田礼子・大場幸夫・中村悦子（編）（1997），現代保育用語辞典，フレーベル館

田村滋男（2013），「保育者」と「保育士」について，永原学園 西九州大学短期大学部紀要，44，1-10.

2）「虫」の定義については，以下の文献を参考にダンゴムシやカタツムリなども含め，保育現場で扱いやすい生き物としている。

山下久美・首藤敏元（2008）虫との関わりが幼児の社会性の発達に与える効果について，埼玉大学紀要，57，105-121

山下久美・首藤敏元（2009）幼稚園・保育園での虫飼育実践の提案，埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，8，159-168

付記

本稿は，以下の発表内容に大幅な修正を加えて作成されたものである。

Mizobe K., Nagai T. (2018) A Study on Improvement of Class in Nursery Teacher Training Course; The Awareness of Students who Take the Classes Integrating Lectures and Exercises, The 19th PECERA Annual Conference, Malaysia

引用・参考文献

足立美和・石沢順子・小笠原大輔（2009）保育士養成課程における「自然体験活動」に期待する効果，共立女子大学家政学部紀要，55，73-88

井上美智子・無藤隆（2007）幼稚園・保育所における自然体験活動の実施実態，大阪大谷大学教育福祉研究，33，1－9

井上美智子（2008）自然とのかかわりの観点からみた現職保育者研修の実施実態，大阪大谷大学教育福祉研究，34，1－6

大橋伸次（2007）保育職志望学生の自然体験学習，埼玉国際学院短期大学研究紀要，28，9-18

大橋伸次・後藤範子・遠藤弘子（2008）保育者養成教育における感性と自然体験，埼玉国際学院短期大学研究紀要，29，17-20

桂木奈己・田尻由美子（2012）幼児の自然体験を豊かにするための保育者養成のあり方，宇都宮共和大学教育・保育・福祉研究，10，23-29

木下康仁（1999）グラウンデッド・セオリー・アプローチ―質的実践研究の再生，弘文堂

木下康仁（2003）グラウンデッド・セオリー・アプローチ―質的研究の誘い，弘文堂

木下康仁（2007）ライブ講義 M-GTA ―実践的質的研究法　修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて，弘文堂

草野いづみ（2011）大学での保育者養成における自然体験授業の効果：保育内容の指導法「環境」の野菜栽培の実践から，帝京大学文学部教育学科紀要，36，71-78

高野牧子・打越みゆき・山田英美（2011）保育者養成における野外教育，山梨県立大学人間福祉学部紀要，6，15-20

永井毅（2014a）自然体験活動の園内研修においての保育者の変化について，兵庫教育大学幼年児童教育研究，26，87-100

永井毅（2014b）自然体験活動を取り入れた園内保育者研修プログラムの工夫，大阪キリスト教短期大学紀要，54，187-195

永井毅（2016）グローバルアクションプログラムを志向したアクティブラーニングとしての演習授業：植物栽培と泥・砂遊びの活動に対する学生の意識，湊川短期大学紀要，52，1－4

前迫ゆり・菅沼美子（2000）幼児教育における「環境」領域の視座，奈良佐保短期大学研究紀要，8，21-26

前迫ゆり・智原江美・石田慎二・中田奈月・高岡昌子・福田公教（2004）地域の子育て環境づくりに向けての保育者養成校の課題と視座―奈良県内保育所の実態調査を通して―，奈良佐保短期大学研究紀要，12，27-44

前迫ゆり（2006）環境領域の保育活動と保育士養成校における自然環境教育，奈良佐保短期大学研究紀要，14，63-81

前徳明子（2010）保育士養成校における自然体験の実態と必要性に関する一考察―環境指導法の授業を通して―，教育財団小池学園紀要，６，109-131
森田清美・笠間典美・庄子いと子（2014）自然体験活動を推進する実践授業の試み～保育者養成課程を例にして，東北文化学園大学保健福祉学研究，12，37-51
文部科学省（2008）幼稚園教育要領解説 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/youkaisetsu.pdf（2017.7アクセス）

Research on Improvements in Class Performance in the Childcare Teacher Training Course : Awareness among the Students Linking Lectures and Exercises

MIZOBE Kazushige [i] , NAGAI Takashi [ii]

Abstract : In recent years, in Japan, the enhancement of nature experience activities in childcare has been emphasized. Thus, the training and nurturing of the childcare person who directly gives the instruction is considered an urgent issue. Based on this point, the “environment” was set in the childcare teacher training course. The purpose of this research was to clarify the change in students’ awareness of the class that linked the lecture (knowledge acquisition) and the practice (natural experience). A consciousness survey was administered to 78 prospective childcare teachers (second grade students) who took classes on childcare “environment” content at a private junior college implemented in the first half of 2015. The main topics taken up in the class were “soil, insects, plants”; natural items that are very familiar in nursery schools. From analysing the results of the consciousness surveys before and after the class, it was found that the students deepened their understanding of the content. Furthermore, through taking the classes, many of these students were able to improve their awareness of the natural environment. In addition, some of the students also improved their awareness to actively engage in childcare practice. It was also found that some of the students adopted the childcare model presented by the teacher in charge of this class, and that for some of them their own career formation was influenced by this class. In future research, it will be necessary to conduct surveys of classes linking lectures and exercises with different content.

Keywords : childcare teacher training course, improving classes, linking lectures and exercises, consciousness of students, career formation

i Professor, Graduate School of Education, Hyogo University of Teacher Education
ii Associate professor, Department of Children’s Education, Minatogawa Junior College